

[B年] 降誕節第2主日(2022年1月2日)**【旧約聖書日課】ゼカリヤ書8章1～8節**

- 1万軍の主の言葉が臨んだ。
 2「万軍の主はこう言われる。
 わたしはシオンに激しい熱情を注ぐ。
 激しい憤りをもって熱情を注ぐ。
 3 主はこう言われる。
 わたしは再びシオンに来て
 エルサレムの真ん中に住まう。
 エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ
 万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。
 4 万軍の主はこう言われる。
 エルサレムの広場には
 再び、老翁、老婆が座すようになる
 それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。
 5 都の広場はわらべとおとめに溢れ
 彼らは広場で笑いさぎめく。
 6 万軍の主はこう言われる。
 そのときになって
 この民の残りの者が見て驚くことを
 わたしも見て驚くであろうかと
 万軍の主は言われる。
 7 万軍の主はこう言われる。
 見よ、日が昇る国からも、日の沈む国からも
 わたしはわが民を救い出し
 8 彼らを連れて来て、エルサレムに住まわせる。
 こうして、彼らはわたしの民となり
 わたしは真実と正義に基づいて
 彼らの神となる。

【使徒書日課】**テサロニケの信徒への手紙一2章1～8節**

1兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがそちらへ行ったことは無駄ではありませんでした。2無駄ではなかったどころか、知っていたとおり、わたしたちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした。3わたしたちの宣教は、迷いや不純な動機に基づくものでも、また、ごまかしによるものでもありません。4わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、こ

のように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。5あなたがたが知っているとおおり、わたしたちは、相手にへつらったり、口実を設けてかすめ取ったりはしませんでした。そのことについては、神が証ししてくださいませ。6また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。7わたしたちは、キリストの使徒として權威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、8わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。

【福音書日課】ルカによる福音書2章41～52節

41さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。42イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。43祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。44イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、45見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。46三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。48両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」49すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」50しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。51それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。52イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

ゼカリヤ書8章1～8節

1万軍の主の言葉が臨んだ。

2「万軍の主はこう言われる。

私はシオンのために大いなる妬みを起こし
大いなる憤りをもってシオンを妬む。

3 主はこう言われる。

私はシオンに帰り
エルサレムのただ中にに住む。
エルサレムは真実の町と呼ばれ
万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。

4 万軍の主はこう言われる。

再び、エルサレムの広場には
年老いた男女が座り
長寿のゆえに、それぞれ手に杖を持つ。

5 町の広場は男女の子どもで満ち

彼らは広場で戯れる。

6 万軍の主はこう言われる。

その時に
この民の残りの者の目には不思議に見えても
私の目にも不思議に見えるだろうか
——万軍の主の仰せ。

7 万軍の主はこう言われる。

日の昇る地から、日の沈む地から
私はわが民を救い出す。

8 私は彼らを連れて来て

エルサレムの中に住ませる。
こうして彼らは私の民となり
私は真実と正義をもって彼らの神となる。

テサロニケの信徒への手紙一2章1～8節

1きょうだいたち、あなたがた自身を知っている
とおおり、私たちがあなたがたのところへ行ったこ
とは無駄ではありませんでした。2それどころか、
知っていたとおおり、私たちは以前フィリピで苦しめ
られ、辱められましたが、私たちの神に勇気づけ
られ、激しい苦闘の中でもあなたがたに神の福音
を語ったのでした。3私たちの宣教は、迷いや不純
な動機から出たものでも、策略によるものでもあ
りません。4私たちは神に認められて福音を委ねら
れたので、このように語っています。人に喜ばれ

るためではなく、私たちの心を吟味される神に喜
んでいただくためです。5知っていたとおおり、私たち
は、こびへつらったり、口実を設けて貪ったりは
しませんでした。それは、神が証ししてください
ます。6また、あなたがたからもほかの人たちから
も、人からの誉れを求めませんでした。7私たちは
キリストの使徒として重んじられてきたのですが、
むしろ、あなたがたの間で幼子のようにになりまし
た。母親がその子どもを慈しみ育てるように、8あ
なたがたをいとおしむ思いから、私たちは、神の
福音だけでなく、自分の命さえも喜んで与えたい
と願ったほどです。あなたがたは私たちの愛する
者となったからです。

ルカによる福音書2章41～52節

41さて、両親は毎年、過越祭にはエルサレムへ旅
をした。42イエスが十二歳になった時も、両親は祭
りの慣習に従って都に上った。43祭りの期間が終
わって帰路に着いたとき、少年イエスはエルサレ
ムに残っておられたが、両親はそれに気付かなか
った。44道連れの中にいるものと思い込んで、一日
分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知
人の中を捜し回ったが、45見つからなかったので、
捜しながらエルサレムへ引き返した。46三日後に
ようやく、イエスが神殿の境内で教師たちの真ん
中に座って、話を聞いたり質問したりしておられ
るのを見つけた。47聞いている人は皆、イエスの賢
さとその受け答えに驚嘆していた。48両親はイエ
スを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことを
してくれました。御覧なさい。お父さんも私も
心配して捜していたのです。」49すると、イエスは
言われた。「どうして私を捜したのですか。私が
自分の父の家にいる〔別訳→父に属する者たちの
間にいる／父の仕事に携わっている〕はずだとい
うことを、知らなかったのですか。」50しかし、両
親には、イエスの言葉の意味が分からなかった。
51それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに
帰り、両親にお仕えになった。母はこれらのこと
をみな心に留めていた。52イエスは神と人から恵
みを受けて、知恵が増し、背丈も伸びていった〔別
訳→年齢を重ねていった〕。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・1月2日「降誕節第2主日」の日課主題は「エルサレム訪問」。広義の降誕物語に含まれる主イエス少年時代のエルサレム巡礼の逸話が福音書日課に置かれている。主流教会の用いる改訂共通聖書日課表では、降誕節第1主日「聖家族の主日」に記念される出来事の一つ。

・旧約聖書日課は、「ゼカリヤ書」から、エルサレムの回復を約束する預言の箇所。使徒書日課は、「テサロニケの信徒への手紙一」から、使徒パウロが自身のテサロニケ宣教について回顧する箇所。

旧約日課(ゼカリヤ8章より)

・「ゼカリヤ書」は、ヘブライ語正典「後の預言者」中、「小預言者」に含まれる12小預言書の一つで、11番目に置かれている。10番目に置かれている「ハガイ書」と共に、預言者の活動時期について明確な表示があり、「エズラ・ネヘミヤ記」に歴史的預言者としての記述がみられる。預言者ゼカリヤについては、「イドの孫でベレクヤの子」(ゼカ 1:1)と出自も記されており、バビロン捕囚後の再建ユダヤ共同体において中心的な役割を担った集団に属していた人物であることは確かである。本預言書の記述によれば、預言活動は、「(ペルシア王)ダレイオス(在位=前 522~486年ごろ)の第二年八月」(1:1)から始まり、「ダレイオス王の第四年」(7:1)の記載もあるが、いつまで続けられたかは不明。再建された神殿で大祭司となった「大祭司ヨシヤ」の任職に関する記述あることから(6:11)、おそらくエルサレム神殿の再建事業が完成したころ(前 515年ごろ)まで総督付き預言者としての活動が続いたと考えられる。「エズラ記」の記述によれば(エズ 5:1、同 6:14など)、預言者ゼカリヤは預言者ハガイと共に、ダビデ王家の直系にあたるユダヤ総督ゼルバベルのもとで難航していたエルサレム神殿再建事業の完成に向けてユダの人々を奮起させる目的で預言を告げていた。

・日課箇所は、エルサレムを都として再建するのが神の御心であり、また神ご自身の事業であるとして、そのときには神の民がこぞってエルサレムに集められ、新たな神の民として再建されるという希望が告げられている。一見すると終末的預言にも思えるが、「エズラ記」との関連から見て、バビロン捕囚後に始まった神殿再建の事業が難航し、ユダの人々の帰還事業も進まない中、離散している人々に向けて、神殿再建事業が完成したときのエルサレムの姿を示すことで希望を与え、帰還を促すことを目的として告げられた預言である。ここには、「第二イザヤ」に見られるような「終末における異邦人も含めたすべての民の救い」という普遍的救済神学は見られず、あくまで「ユダおよびイスラエル(大イスラエル)の民の回復」に主眼があると考えられる。

使徒書日課(1テサロニケ2章より)

・「テサロニケの信徒への手紙一」は、使徒パウロがマケドニア伝道の初期にフィリピに続いて開拓創建したテサロニケの教会に宛てて、早い時期に書き送った書簡。新約文書中、もっとも古い(早い)時期に著された文書と考えられている。テサロニケは、アレクサンドロス大王没後のマケドニア王となったカッサンドロスによって前 315年に創建された町で、現代に至るまでギリシア第二の都市として栄えている。パウロは、バルナバから独立して宣教団を組織した際に最初の宣教地としてマケドニアを選び、フィリピ教会やテサロニケ教会を創設したが(使徒 16~17章)、これらの教会がパウロ宣教団の支援団体となっていったと考えられている。パウロは、本書簡の中で、マケドニア宣教後にアカイア(アテネ、コリント)に移動すると、協力者のテモテをテサロニケに派遣することで継続的に関係を維持していたことを述べている(3:2)。

・日課箇所ではパウロは、自身がテサロニケ伝道に携わった経緯を回顧するように語っている。殊に、自身とテサロニケ教会の人々との関係性を示すために、母子の間の愛をたとえとして用いている。主イエスは、弟子(使徒)たちに神を「天の父」として知ることを教え、人が「神の子」として生きようになることを目標に彼らを導かれた。使徒たちは、その姿を見て、主イエスを「神の御子」と信じ、彼と結びつくことによって「神の子」として生きる道を教えた。パウロら第二世代の弟子たちは、そのような使徒たちの教えや実践の中で信仰を育まれ、自分たちの後に洗礼を通して「神の子」として新しく生まれる者らを、「我が子」同然にいとおし、その信仰を育もうとしたのであろう。パウロが、自分の宣教によって信仰に入ったテサロニケの教会の人々を「わたしにとって愛する者」と語るのは、何もパウロだけが独自に有していた関係性ではなかっただろう。

福音書日課(ルカ2章より)

・日課箇所は、主イエスの少年時代を伝える福音書中唯一の逸話であるが、叙述の仕方から、母マリアの回想を元に伝承されてきたものとして扱われている。「ルカ福音書」は、母マリアの証言に基づくように語られる伝承逸話が少なくない。

・当時のユダ地方やガリラヤ地方に居住するユダヤ人は、地域ごとの会堂に集まる安息日礼拝と共に、三大祭ごとのエルサレム神殿巡礼参詣を習慣としていたと考えられる。「過越祭」をはじめとするユダヤ三大祭は、元来、エルサレム神殿参詣を前提とせず、各家庭や一族ごとに記念される祭であったと考えられるが(出 12章など参照)、バビロン捕囚後に再建された第二神殿時代(の後期、おそらく前2世紀マカベア戦争後から)、ユダヤ民族主義の風潮も相まって徐々にエルサレム巡礼参詣が一般化したと考えられる。主イエスの時代には、村ごとに巡礼団が組織されて、祭の時期のエルサレム神殿参詣が実践されていたとされる。

・主イエスが祭ごとにエルサレムに赴かれていたことは、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)ではほとんど知られていないが、「ヨハネ福音書」が繰り返し語って伝えており、おそらく実際にそのような習慣を守られていたと推認される。「ルカ福音書」は、それが両親によっても守られていたこととして伝えることで、主イエスがユダヤ人社会における本流に身を置かれていたことを示しているのであろう。

・49 節「自分の父の家に」の直訳は「わたしの父の事々の中に」で、「家」という単語はない。しかし、このときに主イエスが留まっていたという「神殿」が「神の家」と表現されることに基づいて、伝統的に「父の家」と訳されてきた。

来週の誕生日 (1月2日～8日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-276 番「あかつきの空の美しい星よ」(= I 346 「たえにうるわしや」)は、宗教改革後の 16 世紀後半ドイツでルター派牧師として活動したフィリップ・ニコライの代表作で、「コラルの女王」とも呼ばれる讃美歌詞。ニコライは、欧州中をペストが襲い、連日 30 件もの葬儀を執り行うという経験をし、ペストが終息した後にこの詞を生んだとされる。この詞には、「天の花婿イエス・キリストについての信仰深い魂の霊的婚礼歌。預言者ダビデの詩編 45 編に基づく」という副題が付けられており、当初は結婚式に用いられたが、後に公現日の讃美歌として定着した。曲は、ストラズブル詩編歌収録の曲を参考にニコライが作ったと考えられている。

・21-194 番「神さまはそのひとり子を」は、1966 年版『こどもさんびか』編纂に際して、編纂委員の一人で日本を代表する讃美歌学者の由木康がヨハネ 3:16 の聖句に基づき作詞し、阿佐ヶ谷教会員で作曲家の小山彰三に作曲を委嘱して作られた。

・21-271 番「喜びはむねに」(= III 42)。作曲者ロセニウスはスウェーデンの牧師家庭で生まれ、メソジスト派の福音宣教師との出会いで伝道者となった。原詞は「Nu evigt val, nu evigt val!」で始まるスウェーデン語だが、フィンランド語に訳されて、フィンランドの作曲家シベリウスがつけた曲と組み合わせられてきた。

・21-180 番「去らせたまえ」は、「シメオンの賛歌」を歌う賛歌。スイスの宗教改革者 J・カルヴァンの教会で音楽を担当したブルジョワが作曲し、カルヴァン編纂の「ジュネーブ詩編歌集」に収められてきた。

21-276「あかつきの空の美しい星よ」

Wie schön leuchtet der Morgenstern

1. Wie schön leuchtet der Morgenstern / Voll Gnad' und Wahrheit von dem Herrn, / Die süße Wurzel Jesse! / Du Sohn David aus Jakobs Stamm, / Mein König und mein Bräutigam, / Hast mir mein Herz besessen, / Lieblich, freundlich, / Schön und herrlich, groß und ehrlich, / Reich von Gaben, / Hoch und sehr prächtig erhaben!
2. Ei meine Perle!, du werthe Kron', / Wahr'r Gottes- und Mariensohn, / Ein hochgeborner König! / Mein Herz heißt dich ein Lilium, / Dein

süßes Evangelium / Ist lauter Milch und Honig. / Ei mein Blümlein, / Hosianna, himmlisch Manna, / Das wir essen, / Deiner kann ich nicht vergessen!

3. Geuss sehr tief in mein Herz hinein, / Du heller Jaspis und Rubin, / Die Flamme deiner Liebe / Und erfreu' mich, daß ich doch bleib' / An deinem auserwählten Leib / Ein' lebendige Rippe! / Nach dir ist mir, / Gratirosa coeli rosa, / Krank und glimmet / Mein Herz, durch Liebe verwundet.
4. Von Gott kommt mir ein Freudenschein, / Wenn du mit deinen Äugelein / Mich freundlich tust anblicken. / O Herr Jesu, mein trautes Gut, / Dein Wort, dein Geist, dein Leib und Blut / Mich innerlich erquicken! / Nimm mich freundlich / In dein' Arme, daß ich warme / Werd' von Gnaden! / Auf dein Wort komm' ich geladen.
5. Herr Gott Vater, mein starker Held, / Du hast mich ewig vor der Welt / In deinem Sohn geliebet. / Dein Sohn hat mich ihm selbst vertraut, / Er ist mein Schatz, ich bin sein' Braut, / Sehr hoch in ihm erfreuet. / Eia, eia, / Himmlisch Leben wird er geben / Mir dort oben! / Ewig soll mein Herz ihn loben.
6. Zwingt die Saiten in Zithara / Und laßt die süße Musika / Ganz freudenreich erschallen, / Daß ich möge mit Jesulein, / Dem wunderschönen Bräut'gam mein, / In steter Liebe wallen! / Singet, springet, / Jubiliret, triumphieret, / Dankt dem Herren! / Groß ist der König der Ehren!
7. Wie bin ich doch so herzlich froh, / Daß mein Schatz ist das A und O. / Der Anfang und das Ende! / Er wird mich doch zu seinem Preis / Aufnehmen in das Paradeis, / Des klopf' ich in die Hände. / Amen! Amen! / Komm, du schöne Freudenkrone, / Bleib nicht lange, / Deiner war' ich mit Verlangen!

21-271「喜びはむねに」

フィンランド語訳詞

1. Nyt riemuitsen, nyt riemuitsen, / nyt kaikki hyvin on! / On lahja taivaan, kuulen sen, / jo tullut verraton. / On kaikkein kallein lahja se: / hän Poika, rakkain veljemme, / hän Poika, rakkain veljemme. / Nyt syystä riemuitsen.
2. Ei murhe voi nyt lannistaa, / en vaille turvaa jää, / jos mainen turva raukeaa, / ja pelko yllättää, / kun veljenäni taivaassa / on Jeesus, Herra ainoa, / on Jeesus, Herra ainoa. / Nyt syystä riemuitsen.
3. En tohdi olla uskotta, / en ilman Jeesusta. / En tohdi ylenkatsoa / näin suurta armoa. / Jos synti onkin suunnaton, / niin valtavampi armo on, / niin valtavampi armo on. / Nyt syystä riemuitsen.
4. Oi tulkaa kaikki ihmiset, / on juhla yhteinen! / Hän luokseen kutsuu syntiset / veljenä heikkojen. / Näin Jumalamme armon tuo, / saat tulla seimen lapsen luo, / saat tulla seimen lapsen luo / ja laulaa riemuiten.

スウェーデン語原歌詞

1. Nu evigt väl, nu evigt väl! / Nu är jag hjärtligt nöjd. / Här har nu hvarje män'skosjäl / En skänk från himlens höjd, / Som mer än tusen världar är: / Guds egen Son, vår border kär! / Nu är jag hjärtligt nöjd.
2. Nu skall med allting blifva väl! / Trots alla jordens qual. / Om mig försmäktade kropp och själ / I tidens jämmerdal, / Har jag på himlens tron en bror, / Då blir allt väl – min tröst är stor; / Jag är af hjärtat nöjd.

21-180 番「去らせたまえ」

Nunc Dimittis

Nunc dimittis servum tuum, / Domine, secundum verbum tuum in pace: / Quia viderunt oculi mei salutare tuum / Quod parasti ante faciem omnium populorum: / Lumen ad revelationem gentium, et gloriam plebis tuae Israel.